Vol.2017-IOT-36 No.40
2017/3/4

[特別セッション] パネルディスカッション: 研究会の，学会のミライ

山井成良[1]　坂下秀[2]　吉田健一[3]　石橋圭介[4]　宮下健輔[5]　柏崎礼生[6]

概要：この特別セッションでは情報処理学会インターネットと運用技術 (IOT) 研究会，電子情報通信学会インターネットアーキテクチャ (IA) 研究会の主査や幹事による，研究会と学会の未来について議論を行う．

[Special Session] panel discussion: about the Mirai of Special Interest Groups of/and academic societies

Nariyoshi Yamai[1]　Shiu Sakashita[2]　Kenichi Yoshida[3]　Keisuke Ishibashi[4]　Kensuke Miyashita[5]
Hiroki Kashiwazaki[6]

Abstract: In this special session, the chiefs and leaders of IPSJ SIG-IOT and IEICE IA discuss the future of special interest groups and academic societies.

Keywords: special interest groups, academic societies, sustainability

学会や研究会という組織は今後どのように変貌していくだろう．学会の研究会の存在意義，企業や行政，あるいは教育研究組織が学会や研究に対して貢献しようとする動機付けは何だろうか．学会や研究会は，研究成果を発表し共有する場だが，共有することによる機能は充分だろうか．異なる組織に属する人々が交流することによる意義はあるのだろうか．研究会やシンポジウム，ワークショップを開催するのにも様々なコストを要する．投じたコストに見合う頻度で開催されているか，どのように評価を行えるだろうか．海外のトップカンファレンスと比べて，国内の研究会では議論が深まらないような印象を受けることがあるが，それは何故だろうか．研究会という場が教育・育成の場であるとするならば，大学のような教育研究組織は学会に対して業務請負をしているということなのだろうか．また，IOT 研究会では大学や研究組織での実践や経験をまとめた発表が行われることがあるが，小中規模の事例の共有にはどれほどの意義があるだろう．一方で組織を維持するための収入源となる論文投稿料の問題，それに関連する論文のオープンアクセス化，研究会予稿の著作権問題など，学会や研究会の本来の目的から離れ，組織の肥大化が目的と化しているという視線も向けられる．そもそも学会や研究会における「本来の目的」とは何だろうか．今の学会や研究会の場を改善することはできるのだろうか．現在の形が充分に完成された組織の形と言えるだろうか．

この特別セッションでは主査として研究会を率いた経験のある方々や，営利企業の代表として率いた経験のある方々に学会・研究会の未来について議論して頂く．決して容易に解決策が明らかになる問題ではないが，議論を通して，新たな模索の種子が撒かれることを期待する．本セッションのパネラーは本稿の著者でもある以下の 4 名である．

- 山井成良 (東京農工大学)
- 坂下秀 (株式会社アクタスソフトウェア)
- 吉田健一 (筑波大学)
- 石橋圭介 (NTT)

モデレーターは宮下健輔 (京都女子大学) でお送りする．

1　東京農工大学
2　株式会社アクタスソフトウェア
3　筑波大学
4　日本電信電話株式会社
5　京都女子大学
6　大阪大学

ⓒ 2017 Information Processing Society of Japan